

アニース教授招聘の思い出

板垣雄三*

三十周年記念特集として『通信』第82号に掲載された座談会〈「イスラム化」プロジェクトの回顧と展望〉に参加したのち、同プロジェクトと不即不離の関係で並行的に実行されたカイロ大学ムハンマド・アニース教授の招聘事業のことも記録しておいたらよいのではないかと考えるようになったので、ここに補足として書かせていただくこととした。

M. アニース教授は20世紀エジプトを代表する歴史家であった。過去形でいうのは、1986年8月29日突発的心臓発作のためロンドンで客死されたからである。当時カイロ留学中の栗田禎子氏が切り抜きを送ってくれた「アフラーム」紙の記事は、「エジプトの歴史家たちのシャイフ、逝く」と報じている。1921年生まれだったから、満65才になったばかりであった。『18世紀英国とスエズ・ルート』、『オスマン国家とアラブ東方』、『1919年革命の研究』などの著作は、エジプトの歴史研究に新境地を拓くものとして輝いている。

アニース教授がAA研の招聘で夫人とともに来日されたのは、1968年10月はじめで、3か月間滞在された。その間、教授は「アラブ近代史の諸段階」に関して7回の連続講義をされ、「イスラム社会の伝統と変容」などのセミナーを開催された。AA研の外でも教授は精力的に活動され、京都大学文学部、人文科学研究所、大阪外国語大学、関西大学、アジア経済研究所、一橋大学、国際文化会館、朝日新聞講堂などで講演を行った。教授の関心は日本研究にも向けられ、広島、長崎を訪問し、政党・財界・マスコミ・労働組合など各界の人びとに会い、同和問題を調査し、大学紛争をバリケードの内外から観察された。

教授の来日は東京外国語大学の学生スト・学園

封鎖とかさなり、AA研に来られた教授の初仕事は全共闘学生との討論であったことも、忘れることはできない。連続講義ははじめ、向かい側の武蔵野女子高の教室をお借りして行われた。

教授の招聘は、日本学術振興会が外国人流動研究員のプログラムによって受け入れてくださったことにより実現した。カイロ―東京のファーストクラスの往復航空券のほかに、日当（一日7千円＝\$19.44）90日分が支給された。航空券はご夫妻のエコノミー切符に変更された。滞在費の不足分は研究所内外の研究者のカンパでまかなわれた。

AA研では、教官も職員も、この企てに全員一致、協力しあった。なにしろ、AA研としてはこれが自主的に外国人学者を招く最初の仕事であったから。岡所長は日本学術振興会に私を連れていき、研究資金を得るための手続きや心得をさとされた。また私とともに国際文化会館におもむいて、松本重治氏に紹介して下さり、一緒に宿泊交渉をして下さった。正式招聘状の英文を、当時AA研に客員教授として滞在しておられたゴードン・ボールズ先生に見てもらおうよう手配して下さったのも、岡所長である。こうした親身の教育は、まことに他では得がたいものだったと思う。半月余の京都でのご夫妻の生活には、羽田明先生がお世話を下さった。私は百万遍のお寺に下宿して、毎朝、近衛ホールに通った。文部省では、天城勲氏がアフリカ大陸から研究者を招くこの計画をつよく支持して下さり、こののち中東・イスラム研究に熱い激励と支援とを寄せられるのである。

欧米からの学者はやって来ても、アジア・アフリカ諸国から学者が訪れることは、まだまったく珍しい時代だった。第三世界に留学する人も数え

(43頁へ続く)

* 東京経済大学教授

(6頁より続き)

る程しかいなかった。その後、『通信』各号に反映されているように AA 研の多角的で濃密な学術交流がめざましく展開するようになったのは、当時を思えばまことに夢のようである。

しかし、まず AA 研がアニース教授を迎え入れたことは、日本全体の国際的学術協力の歴史の中で、その流れを変える画期性をもつものだったと自負できるだろう。欧米「先進国」に学ぶばかりの輸入学問に大きな転換がはじまったのだ。日本とエジプトないしアラブ世界との間の交流に

とって、まずアニース教授が道を開いたことは幸運な出発であった。その後、アジア経済研究所や東京大学などにも、向こうから有力な研究者たちがつぎつぎとやってくるきっかけが与えられたからである。また、日本から研究のフィールドにおもむく若い研究者たちは、この交流の積み重ねから多くの果実を受け取ったに違いない。日本の研究者たちの意欲、姿勢、そして鑑識眼が評価されたのだ。どんな協力ネットワークをつくっていくか、そこでこそ、地域への取り組みの真価が問われるのである。